

第16回アートフィルム・フェスティバル

会 期：2011年11月22日(火)～12月4日(日) *11月28日(月)休館、12日間開催

会 場：アートスペースA /アートラボあいち地下1階

「アートフィルム・フェスティバル」は、実験映画やビデオ・アート、ドキュメンタリー、劇映画など、既存のジャンル区分に捕らわれず、映像表現の新たな可能性を切り開くような、先鋭的な作品を集めた特集上映会である。通算で第16回目の開催となる今回は、映像表現の新しい動向を反映した、全7プログラムによりこの上映会を構成した。

〈オムニバスの新しい風〉は、1960年代に流行した、いくつかの短編を集めて一本の長編を構成するオムニバス形式で、近年、いくつかの新しい試みが起こりつつあることを受けて組んだプログラムである。ここで上映された、仙台短篇映画祭制作プロジェクト311『明日』(2011年)と、河瀬直美が企画した、なら国際映画祭製作『3.11 A Sense of Home Films』(2011年)は、ともに3月11日に発生した東日本大震災を受けて、映像表現に何が出来るのか、可能なのかを追求した作品であり、タイムリーな上映として新聞でも取り上げられ話題となった。

〈マティアス・ミュラー&クリストフ・ジラルデ作品集〉は、1980年代より既存の映画を解体/再構築するファウンド・フッテージの手法で注目を集めたドイツのマティアス・ミュラーと、2000年代前半から始まるクリストフ・ジラルデのコラボレーションの軌跡を、それぞれの単独作品も含めて振り返るプログラムで、この二人の大掛かりな回顧上映としては国内では初めてといえるものだった。海外では著名であり、過去に日本でも「イメージフォーラム・フェスティバル」等で紹介された実績があるが、ポピュラーな存在とはいえないため、全体を3つに分け3日間に渡り上映する構成を採ったところ、作品の持つ知的、批評的な面白さが徐々に浸透して、目を追って観客が増加するという反応が起きた。

フェスティバルのクロージングとして、「愛知芸術文化センター・オリジナル映像作品」の最新第20弾となる牧野貴監督『Generator』の初公開と近作を組み合わせた、〈愛知芸術文化センター・オリジナル映像作品第20弾 牧野貴『Generator』プレミア&近作セレクション〉を行った。「あいちトリエンナーレ2010」に出品した経歴もある牧野監督最新作の初公開は、開催前から問い合わせがあるなど、大いに注目を集めた。